

浄土

monthly JODO

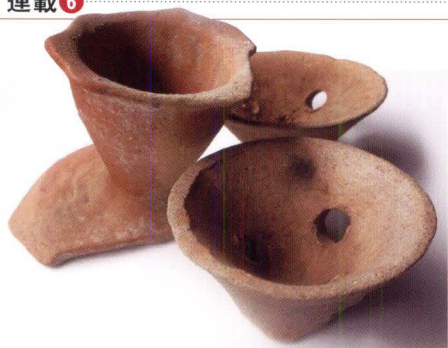
10

2016
October

貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



手前右の土器は高さ45ミリ、口径90ミリ、底は37ミリ。奥はそれよりもいくぶん小ぶりである。いずれも三カ所に穴がある。左は高さ75ミリ、口径最大部75ミリ。周縁はゆるやかな花弁状である。本体の壺の肩と思われる傾斜がある。内部には篋の跡が残る。

左の二点はどこにも割れ跡がないから、完器だろうが、穴が三カ所穿たれている。これでは器として役に立たないはずだ。なんのための穴なのかさっぱりわからない。紐でも通してぶら下げていたのか。いろいろ調べてみたが不明のままである。まあ、正体が不明だからこそ魅力的とも言えるのだが。

骨董市で業者が皿や壺、書画を並べたブルーシートの上にダンボール箱があった。なんとなく気になりのぞいてみた。中身は素朴な土器の欠片である。三十個ほどあっただろうか。

骨董屋の親父に「弥生かな」と聞いてみる。親父は熱意のない口調で「弥生だね」と応える。「ふむ、弥生土器の欠片か」と私は心のなかでつぶやき、物色を始める。その一部が写真の土器である。

これらが本当に弥生式土器の残欠であるのかどうか、私に判断する力はない。形のおもしろいものを五個選んだ。一個百円ほどだったか。

左の残欠は、なにか大きなものの一部だろうと見当をつけていたのだが、偶然三重県四日市の御池古墳群の出土品の写真を見て、同じような形の壺が肩のあたりに施された土器見つけた。それは装飾須恵器、あるいは特殊須恵器と呼ばれるものである。透かしが施された脚台を持つ長頸壺で、動物の小像や小壺が配置されている。

どうやら、この残欠は装飾土器の飾りの小壺のようである。ただ、御池古墳群の出土品は須恵器である。こちらの残欠はたぶん土師器であるから同じように考えるのは少し無理があるかもしれない。装飾土器の残欠と考えれば、同じ遺跡から出土したのであるう穴の空いた土器も装飾物と判断できる。

御池古墳群の出土品は七世紀頃のものというから、古墳時代ということになる。するとこれらの土器は骨董屋の親父が言うように弥生時代のものではないかもしれない。

しかし、時代区分ははっきりと分かれるものではないし、弥生式土器の流れをくむ土師器は、奈良時代から平安時代まで作られていたから、弥生式土器の面影をとどめていてもふしぎではない。

人々の暮らしは年表に現れる時代区分より、もっとゆるやかに変化していくものではないだろうか。

これらの土器は私の仕事机の上で、クリップやカラーチップを放り込む小物入れとなっている。

浄土

2016/10月号 目次

連載 法然上人のお言葉②⑥	梶村 昇	英訳 河西良治	2
法然上人と親鸞聖人(四)		林田康順	4
連載 響流十方		小村正孝	12
連載 江戸の川を歩く⑦		森 清鑑	14
連載小説 渡辺海旭⑦②		前田和男	20
連載 誌上句会		選者=増田河郎子	28
連載 マンガ さっちゃんはネッ		かまちよしろう	31
編集後記			32



表紙題字=中村康隆元浄土門主

表紙写真=鬼海弘雄

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頻伽舎

法然上人のお言葉

ご法語

安房の助という一文不通いちもんふつうの陰陽師おんみょうしが申す念仏と、源空げんくうが念仏とまったくかわりめなし、と。
(聖光上人伝説の詞)

現代語訳—安房の助という一つの文字も分らない陰陽師が申す念仏と、源空が申す念仏とは、まったく違いはない、と。

Honen Shonin's Sayings

The nembutsu that an onmyoji (yin-yang diviner) called Awanosuke, of total illiteracy, utters is not at all different from Genku's (i.e., Honen's).
(Shokoshonin Densetsu no Kotoba)

解説

陰陽師を「うらない師」と訳している本もあります。厳密に言えば少し違うのですが、大体そのようなもので、五、六世紀に唐から日本に伝えられた、正式な官僚でした。十世紀頃、民間信仰になっておりますが、その一人に安房の助という男がいて、ごろ悪行ばかりしておりました。ところがある日、道に迷い、この世でもこのように迷うものなので、後世（あの世）では、どうしても先達が必要だと感じ、法然に帰依したということです。その男の申す念仏と、法然の申す念仏と、まったく変わりはないということです。念仏が人間の計らいで申すものであれば、人によって質に相違があるでしょうが、阿弥陀仏の本願の行ですから、誰が申そうと同じことです。言われてみれば、その通りなのです。どうしても差をつけて考えてみたくなります。人間の業みたいなものなのでしょうか。

なお、源空は法然の実名で、聖光は浄土宗第二代です。

Commentary

According to a certain interpretation, the word onmyoji is translated as uranaishi, which means a fortune-teller. The two words, strictly speaking, have a little different meanings but express broadly similar ideas. They denote formal officials in a bureaucracy that was brought over from fifth or sixth century China at the Tang period to Japan. In about the tenth century, there were folk beliefs in such officials, one of whom was a man called Awanokue. He always committed evil acts. However, one day he lost his way and felt that he would get lost in this way even in this life and that he would really need some guide in the life to come. Then he is said to have become a believer in Honen. In the above quotation, Honen said that the man's nembutsu and his own were by no means different. If the nembutsu was what was uttered at human discretion, it would vary in quality from person to person. But the nembutsu is uttered according to Amida Buddha's Original Vow, so, whoever may do it, there is no difference among their nembutsus. This really proves to be true, but we humans want to find any differences among ours at any cost. Isn't this just our fate caused by human karma?

In the above quotation, Genku is Honen's real name and Shoko is the second successor of the Sect of the Pure Land.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

英訳……

河西良治

中央大学文学部教授

法然上人 と親鸞聖人

〔連載四〕師への思い②

林田 康順

（大正大学教授）

『教行信証』の撰述背景

建仁元（一二〇一）年、法然上人にお会いした親鸞聖人は、そのまま本願念仏の教えに帰依したことを『教行信証』後序で次のように記しています。

しかるに愚禿^{ぐとく}釈の鸞、建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す。

（『真宗聖典』四七二頁）

（試訳）ところで、私愚禿親鸞は、建仁元年、これまで修めてきた種々雑多な行を棄てて、本願念仏に帰依しました。

その後、元久元（一二〇四）年、比叡山の徒による専修念仏^{せんじゆぶつ}の停止運動^{ちやうじ}に対して、法然上人は門弟達の非行を戒めた『七箇条制誡』を撰述されます。一九〇名に上る弟子の署名の中、三十二歳の親鸞聖人は、八十七番目に「僧綽空^{しやくくう}」（『昭和修法然上人全集』以下、

『昭法全』七九二頁）と署名されます。親鸞聖人も専修念仏への弾圧をひしひしと身に感じていたことでしょう。

翌元久二年、親鸞聖人は、法然上人から『選択集』の書写を許され、同時に師の真影を写しとる許可を得ました。親鸞聖人は、その時の感激を『教行信証』後序において次のように記しています。

『選択本願念仏集』は、ぜんんぶはくりく 禅定博陸（月輪殿兼実のこと、法名円照）の教命によりて撰集せしめるところなり、真宗の簡要、念仏の奥義、これに撰在せり。見るもの論り易し。まことにこれ希有最勝の華文、無上甚深の宝典なり。年を渉り日を渉りて、その教誨を蒙るの人、千万なりといへども、親といひ疎といひ、この見写を獲るの徒、はなはだもって難し、しかるにすでに製作を書写し、真影を图画せり。これ専念正業の徳なり、これ決定往生の徴なり。よりて悲喜の涙を抑へて由来の縁を註す。（『真宗聖典』四七三頁）

（試訳）『選択集』は、前の関白九条兼実公の求めに応じて撰述されたものです。浄土真実の教えの肝要、本願念仏の奥義がその一書の中に収められていて、拝読する者はたやすく理解することができます。まことに『選択集』こそ、希有にして、もつとも勝れた御文であり、この上なく奥深い教えが説示された宝典であります。長年にわたり、法然上人から教えを伝えられた人々は実にたくさんいますが、親疎を問わず、『選択集』の書写を許された者はごくわずかしかおりません。しかし、私親鸞は、すでに『選択集』の書写と師の御影を描くことを許されました。このことは専修念仏を修めてきたことによる功德の一端であり、浄土往生が叶うであろうことの前触れでありましょう。その為、

喜びの涙を抑えて、事の次第を書き記すこととしたのです

このように親鸞聖人は、『選択集』の書写を許されたことをことのほかお喜びです。そして親鸞聖人は、この一節に続けて、「師教の恩厚」を仰ぎ、「至孝」に報いるため、その主著『教行信証』を執筆したのだと述懐されます。こうした説示からも、親鸞聖人の師法然上人への深い思いが感じられます。

「よきひとの仰せをかぶりて」

建永二（一二〇七）年、越後に流罪された親鸞聖人は、そこで約五年の歳月を過ごし、その間に恵信尼と結婚し、四男三女を授かります。それ以後、建保二（一二二四）年の頃から約二十年間、上野・下野・常陸・下総など関東に留まり、念仏布教に尽力されます。この頃から『教行信証』の執筆をはじめ、六十三歳頃に一応の完成をみたと考えられます。後、京都に帰り五条西洞院に居を定めます。京都から関東の信者に多数の消息を送って布教に努めた親鸞聖人ですが、この間、建長八（一二五六）年、関東に赴いていた子の善鸞が「父親鸞には秘密の教えがある」などと信者を惑わしたため義絶状を送るという悲劇も味わったと伝えられます。

法然上人と離れることを余儀なくされた親鸞聖人ですが、師への思いは強く、康元元（一二五六）年、八十四歳の時には法然上人の語録を集めた『西方指南鈔』を編集（もしくは書写）されます。師への思いを吐露する言葉は非常に多く遺されていますが、ここでは唯円編『歎異抄』第二章の一節を紹介します。

親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひと（法然）

の仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細しさいなきなり。念仏は、まことに浄土に生るるたねにてやはんべるらん。また地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもつて存知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ。そのゆゑは、自余の行もはげみて仏に成るべかりける身が念仏を申して地獄にもおちて候はばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔も候はめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せらることならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申すむね、またもつてむなしかるべからず候ふか。

（『真宗聖典』八三三頁～八三三頁）

（試訳）私親鸞においては、「ただお念仏を称えて、阿弥陀仏に救われて浄土往生を遂げさせていただくのです」という法然上人のお示しを受け止め、それを信じる以外に、特別の教えなど何もありません。お念仏は本当にお浄土に生まれる原因であるのか、はたまた地獄に堕ちる行いとなるのか。まったくもつて私の伺い知るところではありません。たとえ法然上人に言いくるめられて、お念仏を称えた結果、地獄に堕ちたとしても、決して後悔などいたしません。なぜなら、さまざまな行を励んで成仏を遂げられるはずであった私が、お念仏を称えたため地獄に堕ちたということであれば、法然上人に言いくるめられてしまったという後悔も残るのでしょうが、どんな行も満足に修められない私には、所詮、地獄こそわが定まった住所に他ならないからです。阿弥陀仏の本願が真実であるならば、それを説き示された釈尊の教説が偽りであるはずはありません。釈尊の

教説が真実であるならば、本願の意を明らかにされた善導大師の釈文が偽りであるはずはありません。善導大師の釈文が真実であるならば、選択の意を創唱された法然上人のお言葉が偽りであるはずはありません。法然上人のお言葉が真実であるならば、それを伝えていた私親鸞が申すことも、また虚しいものではないといえるのではないのでしょうか。

この一節から親鸞聖人の法然上人への全幅の信頼、信仰に近いものが感じられます。

「阿弥陀如来化してこそ 本師源空としめしけれ」

親鸞聖人のそうした信仰に近い思いを裏付けるものとして、妻恵信尼が、法然上人を勢至菩薩の化身と夢見た逸話を指摘できます（『恵信尼消息』『真宗聖典』八二二―八二三頁）。親鸞聖人は、そうした思いに基づいて、宝治二（一二四八）年撰『高僧和讃』の「源空讃」において、法然上人を次のように讃じています。

本師源空の本地をば 世俗のひとびとあひつたへ

綽和尚と称せしめ あるいは善導としめしけり

源空勢至と示現し あるいは弥陀と顕現す

上皇・群臣尊敬し 京夷庶民欽仰す

（『真宗聖典』五九六頁―五九七頁）

（試訳）専修念仏の根本の導師である法然上人のもとの境地について、世間の人々はそのように伝え合っています。法然上人はもと道綽（どうしゃく）禪師ではないかと称えられ、あるいはもと善導大師であろうと示されています。はたまた法然上人は勢至菩薩の化身としてこの世に現れ、あるいは阿弥陀如来の生まれ変わりとして姿を現されたと讃えられてい

ます。上皇から多くの家臣に至るまで広く尊敬を受け、都から地方まですべての人々に仰ぎ慕われています。）

このように親鸞聖人は、法然上人のことを、その本地は道綽禪師か善導大師か、はたまた勢至菩薩か阿弥陀仏かと讃じられてゐる声を力強く伝えていきます。

あるいは親鸞聖人は、法然上人の往生の奇瑞に対して次のような讃を残しています。

阿弥陀如来化してこそ 本師源空としめしけれ

化縁すでにつきぬれば 浄土にかへりたまひにき

本師源空のをはりに 光明紫雲のごとくなり

音楽哀婉雅亮にて 異香みぎりに映芳す

（『真宗聖典』五九八頁）

（試訳）阿弥陀如来は自ら化現して、専修念仏の根本の導師・法然上人としてお姿を示されました。人々を教化する御縁が尽きたので、極楽浄土へお還りになりました。法然上人の御臨終には、光明が紫雲のように広がり、どこからともなく奏でられる音楽があられに美しく、みやびに響きわたり、妙なる芳香はあたり一面にただよいました）

このように親鸞聖人は、ご自身の思いとしても法然上人を阿弥陀仏の化身として受け止めていたことがわかります。弘長二（一二六二）年十一月二十八日、九十歳をもって往生を遂げられた親鸞聖人ですが、法然上人へのこうした思いは、前号に紹介した最晩年の消息まで決して絶えることなく抱き続けられるのです。

いかがでしょうか。私たちは、親鸞聖人の法然上人への深い尊崇の思いをまずもって学ばせていただかねばなりません。こうした思いを受け止めた上で、次号からいよいよ法然上人と親鸞聖人の教えの相違へと入っていくことと致しましょう。

（続く）

◎一七日二七日いちしちにちにしちにちなんど服薬そうりやくし候そうらわんには、六斎ろくさいの日にあたりて候わんをば、いかがし候べき。答う。それちからおよばぬ事にて候え。さればとて罪にては候まじ。
さけのむは、つみにて候か。答う。ま事にはのむべくなければども、この世のならい。

(いずれも法然『百四十五箇条問答』)

一週間、二週間にわたつて薬を服用する間に六斎日にあたつてしまった場合には
いかがすればいいでしょうか。

(答) 致し方ありません。服用したからといって罪にはなりません。
お酒を飲むのは罪になるでしょうか。

(答) 本来飲むべきではありませんが、この世のならいです。

お葬儀に想うこと

八月のお盆明けに勤めたお檀家のお葬式のこと。葬儀・告別式が終わり火葬場へ茶毘に向かう車中、運転する施主の義兄にあたる方からこんな質問を受けた。

「火葬場への往きと帰り道をかえるのはなぜ？」

「読経の途中で住職が立って何かを読んでいたが、あれが引導？」

「分骨というのは、どういうときにする？」

いずれも葬儀にまつわることだ。その車には義兄の夫人と親戚の方も乗られており、「そうそう、私も知りたかったの」と、はからずも葬儀談義で盛り上がった。

往・復で道を変えることについては、「亡くなった方に対する遺された方の心情は複雑なもの。死んじやイヤだ、戻ってきて、といった哀惜の念から涙を流す一方で、死者への畏怖や忌避というものも覚えるのは否めない。死者は死者の世界に行くべきだという無意識の感情はたらくものでもあり、家にはもうついてこないでほしい、迷わずに往生してほしいという思いから道を変えるようになったとされる」ことを説明した。初めて聞いたと感嘆していた。

引導は本来、生者に対し仏の教えを説いて仏道に引き導くことで、それを亡

くなつた方に授けるのは、速やかに浄土往生を遂げるよう願つてのことであり、読み上げた文は、苦しみ多い無常の娑婆を迷わずに離れ、阿弥陀如来の本願来迎により浄土に向われんことを願つてしたためたものであることを話した。「なるほど」を繰り返していた。引導の文は、耳で聞いただけでもなるべくわかつてもらえるであろう言葉を使うよう留意していたつもりだが、まだ再考、配慮の余地ありと感じた。

分骨は、親が亡くなつた際に兄弟で分けるなどのケースがあること、関西などでは、遺骨を一部、本山に納める慣習があること、なお、地方によっては遺骨はすべてでなく一部のみを骨壺に納めて埋葬し、あとのほとんどは火葬場や公共墓地の供養塔などに合祀したり、粉末にして仏像を造る「骨仏」にするかしているようだ、と話した。大変な驚きようだった。「郷に入れば郷に従え」というが、葬送は地域により慣習が大きく違い、「ウチの地方ではこうやってゐる」との主張は通用しないことが多いのでご注意を、とも付け加えた。

運転手を務めてくれた義兄も当寺のお檀家である。葬儀に関する基本的なこととは檀信徒に折に触れ話してきたつもりだったが、まだまだ努力が足りないことを痛感した。

「葬儀で行うことはすべて仏教」と思われがちだが、一連の儀礼には、宗義以前にそもそも仏教に関係ないことも含まれている。どの宗派においても、その宗義に則った純粹な葬儀というものの確立が理想かもしれないが、関係ないからといって、そうした儀礼や作法を單純に一刀両断できるものではないし、個人的には、すべきでないとも思っている。

古の人々が編み出した儀礼や作法（そこには互いに矛盾と感ぜられるものもあるが）、それがいつしか習俗——こうやるべきもの——として浸透し、繰り返されてきた。当初そこに込められた意義の伝承は途切れがちではあるが、それは人々が「知らない」だけであり、「知らないから、やる意義はない」ということにはならない。古人は、死者に対するさまざまな想いをカタチにして表し、届けようと知恵を出しあつたに違いない。もちろん、見直したほうがよいとされる習俗もあるが、葬儀不要論が交わされる昨今であればこそ、古人の想いにもう一度目を向ける要ありと感じたことである。我々葬儀を執行する側にも、たとえば葬儀中、儀礼や作法を始める際に説明するなどの工夫が求められもしよう。相互に共感と共有が図られてこそ、意識も意義も変わる——あらためてそんなことを感じた葬儀であつた。

（小村 正孝）

江戸の川 を歩く

第七回

江戸ウォーカー

森清鑑

楓川、三十三間堀

家康以来の江戸埋め立て、都市造成計画を忍ばせる川が楓川である。日本橋川、江戸橋の麓から八丁堀に流れ込む川。日本橋川、船を江戸橋のところまで左に曲げる。すると右手に材木河岸が連なる。本材木町一、八丁目。江戸草創期、大船で輸送されてきた資材は、ここで陸揚げされ、八重洲口につながる運河で城まで運ばれていた。つまり、この川縁が初期の江戸湊であった。その後の埋め立て工事により、茅場町、八丁堀役人町、霊岸島ができて行く。

楓川、海賊橋を潜るとまもなく、左手には、海防の一翼を担う九鬼一族の上屋敷が見え、熊本藩細川の下屋敷。新場橋を潜ると桑名藩、松平越中守の上屋敷の屋根が見える。したがって、その前が越中橋。これを潜って、下ると、松幡橋。そして弾正橋に出る。ここで東西に流れる八丁堀と合流する。この間、右手はずっと材木河岸である。

八丁堀・京橋川

隅田川、右手に石川島を見つつ、左、鉄砲州伝いに左に折れる。すると、稲荷橋があり、湊稲荷、鉄砲州富士が見える。ここからが八丁堀である。堀の左右には、八丁堀河岸が連なる。やがて右手から流れてくる、楓川と合流。この辺り、川の十字路で、「三つ橋」という。弾正橋（楓川）、真福寺橋（三十間堀）、白魚橋（牛草橋、京橋川）。見事な景観で芭蕉の句も残されている。

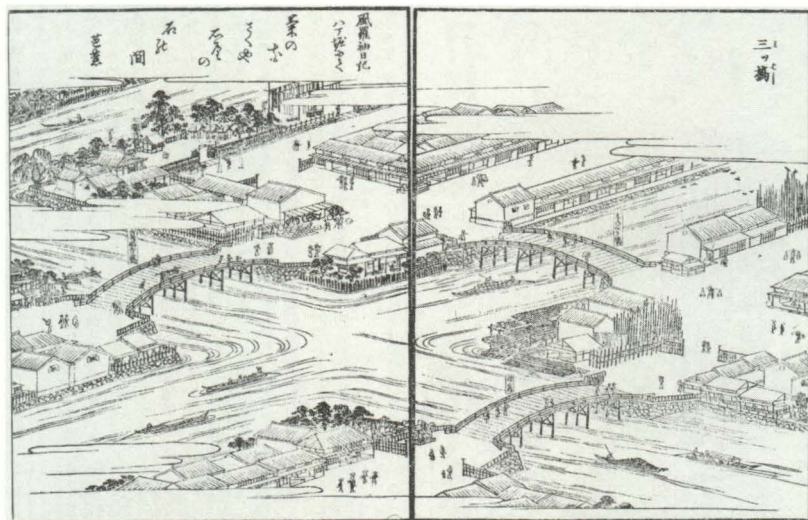
白魚橋（牛草橋、京橋川へ）

白魚橋を潜ると八丁堀は京橋川となり、京橋から比丘尼橋で御堀に出る。京橋川の右側が、有名な竹河岸で、広重は林立する竹と月、京橋の光景を描いている。舟が比丘尼橋に至るまであちこちに白魚河岸があり、大川で獲れた白魚の間屋を意味する白魚屋敷がある。

三十間堀

舟は真福寺橋を潜る。右手には白魚河岸と広い白魚

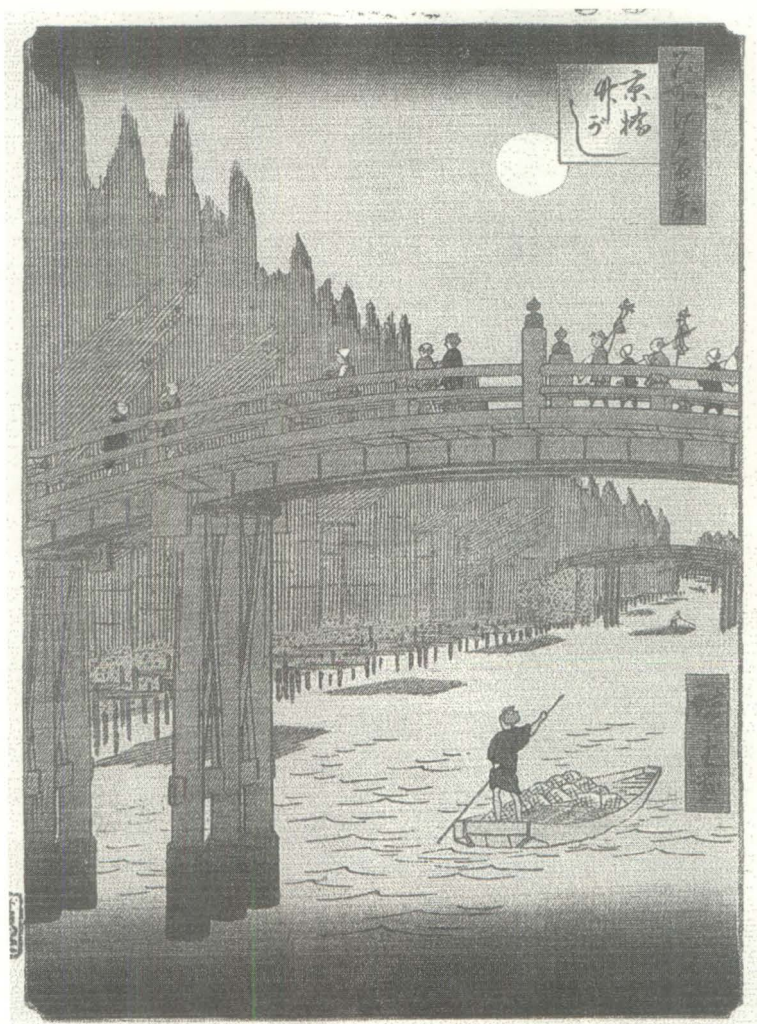




◆江戸名所図会 三つ橋の光景：左 真福寺橋（三十間堀へ）。右弾正橋（楓川へ）。中央右 白魚橋（牛草橋、京橋川へ）

屋敷がある。白魚間屋は多いがここが元締め。川は、今の京橋公園のところを右に曲がり、次いで、左に折れる。御堀に沿って汐留橋まで流れる、三十間堀の始まりである。文字通り、幅三十間（約五十五メートル）の堀。この川は、今の銀座一（八丁目通りと昭和通り）の中間を南北に流れていた。文政年間（一八一八）に、両岸の整備で実際の川幅は、十九間（約三十五メートル）に圧縮されているが、屋形舟や荷船が行き交い、舟流通の要であることに変わりはない。名称も三十間堀として維持され、両岸に江戸文化の華が咲いた。いわば、銀座の真ん中を流れていたこの川は、戦前までは生き生きと活動していたが、昭和二十七年に埋め立てられ、今では、本当にここに川があったのかという状態である。

江戸期の三十間堀を北から南へと運行する。舟が紀伊国橋を通ると次は、三原橋。数寄屋橋御門からまっすぐ来る道（晴海通り）に架かる橋である。今の三原橋交差点。その地下の映画館や飲食街が嘗ての堀の川底跡である。三原橋を左に折れば、左側に歌舞伎座があるが、ここは、江戸時代、熊本藩細川越中守の拝



◆広重 京橋竹河岸 京橋から左、竹が林立している光景。

領屋敷（特に使用目的を限定しない屋敷）で、その前は、采女ヶ原（ねむがはら）といい、馬場があった。雪旦は、派手に落馬するものや、乗りこなしている武士の姿をいきいきと江戸名所図会に描いている。馬場の傍らには、催し小屋や店が密集し、武士に混じって町民も沢山集まり、賑わいを見せている。

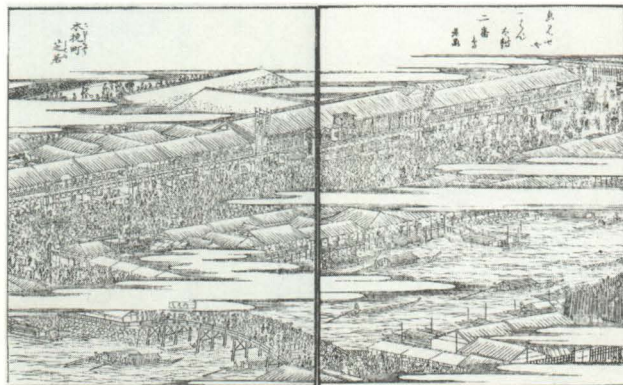
幕末には、三十間堀全体の両岸に遊船宿がならび、屋形舟、屋根船など様々な船が入り込み、大繁盛。特に、その象徴が、木挽町芝居小屋の隆盛である。

舟が三原橋を潜る。ちよつと行くと木挽橋。橋の上は人、人、人。橋の左岸には、森田座森田勘弥、山村座、河原崎座、中村座が、ずらりと並び。人で埋め尽くされている。何艘もの屋形船が行き交い、接岸。提灯に彩られた店の中では、川面を見ながら一杯やっている人の姿。すさまじいばかりの賑やかな光景である。

汐留川

舟が木挽町七丁目まで来ると、左方向に汐留橋が見えてくる。ここで三十間堀は終了。赤坂溜池から虎御

門、幸橋御門を通過し、芝口橋（新橋）へと流れる堀。三十間堀を左に見ながら汐留橋を潜り、直進すると浜御殿（旧浜離宮庭園）に達する。これが汐留川である。したがって、江戸の人々は、三十間堀から浜御殿そして江戸湾に至る、遊覧船の旅を楽しむことができた。



◆江戸名所図会 木挽町芝居

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第七十二回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

仏教壁画切り取り男との出会い④



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。才気煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担い、印度学の拠点ドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍らキリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、スイスはバーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表、仏教に造詣が深いオーストリアハルガリー帝国元駐日代理公使クーデンホーフ伯と出会う。また、ヨーロッパ初の比丘ニャーナティロカルの存在を知らされ強い興味を覚える。一方盟友・荻原雲来が博士号取得して帰国。一人異郷に残された海旭はロイマンから博士号取得を促されたところへ母トナ逝去の悲報で気持ち萎えかけるが、気鋭の仏教学者ヴァレザーと出合い龍樹の『中論』の独語訳を手伝うことで博士論文にも弾みがつき首尾よく博士号を取得。しかし仏門への導きの師・端山海定逝去の報に接し海旭の帰心は消え、宗門からの給付金も打ち切られる。畏友の東大教授の姉崎正治の仲介で富豪カーンに援助を求めるも断られ万策尽きたかに思えたが、ロイマン教授の「共同研究者」に遇され、中央アジアで発掘が進む歴史的文献を求めて、探検家のル・コックに接触することになった。

西域死語文書の気の遠くなる解説作業

渡辺海旭は、ドイツを代表する剛腕の探検家にして気鋭のオリエント学者でもあるル・コックをベルリン民俗博物館に訪ね、彼が中央アジア探検で切り取ってきた仏教壁画を見せられて衝撃をうけた後、本題を切り出した。「ロイマン教授の名代としてここへ伺ったのは、ぜひともご協力をお願いしたいことがありまして……」と、説明をはじめた。

各国探検隊が発掘した文化遺産の中には、仏教經典の貴重な古葉もふくまれていたが、それらを大別すると、サンスクリット、プラークリット（古代インドの俗語）、チベット語、ウイグル語、そしてかつて西域に勃興しては消えていった小国の言葉（海旭とロイマンの間の符牒でいえば「西域死語」）で記されていた。そのうち西域死語文書以外は、ピツシエルのベルリン大学、オルデンブルクのペテルスブルク大学、ヘルンレのオックスフォード

大学、レヴィのパリ大学と、それぞれ東洋学の碩学を擁するアカデミアの拠点で手をつけられて、研究成果を上げつつあった。「後発」のロイマン教授と海旭は、あえてどこも手をつけない西域死語文書に挑戦、これはお膝元のベルリン大学にとっても無用の文献と思われるので貸し出してもらえないかというのが海旭からの依頼の趣旨であった。

西域死語文書の解説は、言うは易いが行なうのは極めて難しい作業であった。ちなみに辞書もなく解説できる研究者もいないなか、まずは西域死語文書を通読、その長さと、繰り返し登場する仏教用語と思われる「キイワード」の配列から、それがどのような經典のどの部分かを推定しながら絞り込んでいく。その際、同定ツールとして使われるのは、天竺伝来の經典をほぼ網羅しているとされる漢訳の「一切経」。それで、うまく同定ができたなら、漢訳をたよりに『キイワード』をはじめ周辺の言葉の意味をこつこつと読み解い

ていく。海旭が編み出した「秘策」ではあるが、実に気の遠くなる作業であった。

それを海旭から縷々説明されて、ル・コックは大いに感じ入り、さらに海旭の次の一言が、ベルリン民俗博物館の信長^ルを、利休を内奥に秘めた取集家^ルへと戻したようだった。「この気の遠くなる作業はわれわれ仏教学者のためになるだけではありません。西域の死語が解説されれば、東西文明の十字路の美術や学芸全般にとどまらず、東西文明の政治・経済、外交の研究にも大いに資するはずだ」ル・コックは海旭の手をとると、書庫へ案内し、所属する文献の山を前に、ひとくさりライバルのグリウンヴェーデル館長への批判を忘れなかった。

「ヘレニズムかぶれの隊長殿の趣味で、貴兄とロイマン先生が望むような文献はあまりないだろうがね」

といってから、大きく息を呑み込むと、海旭の目を覗き込んでいった。

「それよりも、貴兄の故国の探検隊の成果物を活用したらどうかね。同じ東洋人だから、目の付けどころも似ているのではないかな」

「故国の探検隊」とは、浄土真宗西本願寺派二十二代法主の大谷光瑞によって、中央アジアに派遣された探検隊のことである。海旭が留学をした二年後の一九〇二年～一九〇四年にかけて、光瑞自身が隊長となつてカシユガル、ホータン、クチャなどを調査。それに続いて、第二次調査隊が、今まさに（一九〇八～一九〇九年）外モンゴルからタリム盆地に入りトルファンを調査しているところだった。ル・コックにはまさに痛いところをつかれた。すでに海旭はロイマンから指示をうけて、故国の西本願寺当局に問い合わせていたが、思うように事が運ばないこともあつて、ベルリンを訪ねたという経緯があつたからである。文献の山を渉猟しているうちに、帰りの列車の時間がやってきた。「必要な文書があればいつでも貸し出す」というル・コックに謝

意を表して、海旭はベルリン民俗博物館を後にした。

後に中国政府は 「文明の破壊者」と指弾

さて、故国の大谷探検隊がもちかへつた西域文書の入手の首尾について語る前に、海旭がベルリンで拝観をした貴重な西域の壁画をめぐる後日談を記しておこう。

ル・コックは海旭を前に宣言したとおり、一九一三年、隊長として四回目の探検隊を率いて、クチャ、トルファンから唐代の中国化した様式の壁画も切りはがして持ち帰った。それについて、後に回想録の『東トルキスタン風物詩』で、こう凱歌を挙げている。

「いまやベルリン民族学博物館は、純粹の唐代絵画を所有するに至つた、と誇りをもって言うことができる」

一九二五年には、生涯のライバルであつたグリウンヴェーデルの後を襲つてベルリン民

俗博物館館長に就任、一九三〇年に他界。その三年後、海旭も死去。壁画は、その三年後に政権の座についたヒトラーとナチスの管理するところとなり、一九四五年、博物館が連合軍の空襲をうけたことで、疎開された一部をのぞいて大半は灰燼に帰した。

これにより、往時海旭を大いに驚かせた「文明世界に連れ出して救う」というル・コックの強弁もまた敗れ去った。いや、正確にいえば、それ以前に敗れ去っていた。

ル・コックの暴挙を目撃した現地の人々は、切り取られた壁画が金になると知って破壊しはじめ、多くが世界中の骨董の闇市場へと散っていったからである。

現在、ル・コックは「英雄」どころか、「文明の破壊者」「文化財泥棒」として中国政府から厳しく批判されている。

大谷探検隊出土品非公開の不可思議

それでは、本題に戻って、故国の探検隊が

もちかえった西域文書の入手の首尾について語るとしよう。「同じ東洋人だから、目の付けどころも似ているのでは」というル・コックの指摘は、そのとおりだった。

西欧列強の探検隊が考古学・人類学・古代言語学的アプローチから資料収集をめざしたのに対し、大谷探検隊は、インドから日本へ伝来した仏教の経路を明らかにすることを主目的にした点にきわだった特徴があった。すなわち、「仏教徒としての仏教的アプローチ」であり、自ら隊長として指揮をとった浄土真宗西本願寺派二十二代法主の大谷光瑞自身も『西域考古図譜』の中でこう述べている。

「最大の眼目は、仏教東漸の経路を明らかにし、昔シナの求法僧がインドに赴き遺跡を訪ね、また中央アジアがイスラム教徒の手に落ちたために仏教の被った圧迫の状況を考察するような、仏教史上における諸々の疑問を解こうとするものであった。

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門
古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)3842-1128 9
振替001800245231

第二に、中央アジアに遺存する経論、仏像、仏具等を収集し、もって仏教教義の研究および考古学上の研究に資料を提供し、もし出来うれば地理学、地質学および気象学上の種々の疑問もあわせて氷解させたいと考えたのである」

大谷探検隊が持ち帰ったものの中には、海旭がロイマンと共に目下取り組んでいる『西域死語文書の気の遠くなる解説作業』のための宝があることは間違いなかった。そこで、海旭とロイマンは、探検隊長の大谷光瑞に書信をしたため、「其蒐集せられた材料の中、

この死語に関するもの文、短期の恩借」(『新に発見せられたる西域古語聖典の研究』『月全集』上巻所収)を申し出た。

しかし、法主の返信は、「惜しい哉、其珍奇の資料は、今や内務省の保管に属して容易に原物を貸借することは出来ぬ」(同上)というものであった。

すなわち、大谷探検隊が中央アジアから持ち帰った出土品は内務省側に渡ってしまった、しかも非公開とされてしまったというのである。これに対して海旭は、『新仏教』誌上(明治四十一年二月)で、訴えた。

「吾が内務省も徒らに珍品を宝庫に秘蔵するの愚をなさず、奮ふてこの新研究の爲め、万国的學術の交際を開始せらるることは偏に予の信ずる所である。(同上)」

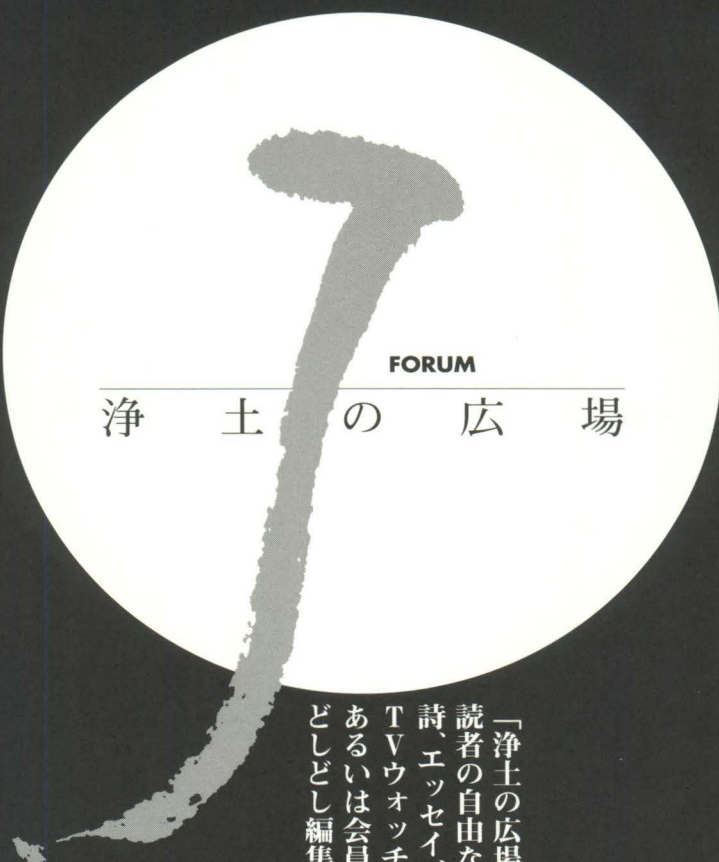
だが、内務省も西本願寺も、非公開の態度を変えることはなかった。それは、二年後に海旭が帰国してからも同様だった。その間に、ドイツ、ロシア、イギリス、フランスでは、各国探検隊がもたらした文献をもとに研究が着々と進み、赫々たる学問的成果を上げていたが、日本だけが相変わらず「非公開」の立場をとっていたため、各国のオリエント学への貢献ができないだけでなく、なによりも自らの仏教学研究に遅れをとることになった。海旭はこれを看過できず、帰朝後の明治四十五年、再び筆をとると、「宗教界」誌上(明治四十五年六月)で、こう訴えた。

「一体折角集めた好資料だから宝の持腐れに

せずに吾国でも出来るものは力限り研究し、吾国で少し手の届かぬと思ふものは英でも独でも露でも相応な学者に遠慮なく使用させて学界の利益を計つたらよからう。英国でも露国でも現にそれを実行して居るではないか。兎に角西本願寺或は私人の大谷伯爵家では今少し其蒐集の材料を学术界に利用し世界的に文運開展の道を講ずる様に願へぬものか。」
〔于闐発見の小品般若断片』『壺月全集』上巻所収〕

残念ながら、これは洋行帰りの無名の一学僧の「遠吠え」としてほっておかれ、大谷探検隊がもたらした歴史的文献は、海旭が死去したあとも学問のために提供されることはなかった。それが実現するのは、戦後もしばらくたってからのことである。

(つづく)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●友

〔特選〕友と酌む地酒の味や虫しぐれ

池田 伊吹

「地酒」の意味をずっと狭めて、自分たちで醸したものと解釈したいのだが、わが国はどうも窮屈である。市販のものだろう。友人といっぱいやつていると、夜の更けるのも知らないでいる。虫の音はいよいよ繁くなる。

〔佳作〕友として冷酒にて口湿しやる

本間 康祐

ギターにて「戦友」を弾く夕端居

大谷 亜美

眠り落ちし友の横顔秋の夜

浜口千賀子

●達

〔特選〕宗達の雷神の臍青葉冷え

和田 雄三

江戸時代前期に活躍した俵屋宗達の傑作である。風神雷神とも同じ臍だが、白い雷神のほうがはつきりしている。青葉冷えというが、

冷えなど何のそのだ。俳諧は滑稽である。雷神の臍から俳諧の真髓に達しようとしている。

〈佳作〉ご隠居の達者な見せ場祭笛

五十嵐明美

達者かと残暑見舞いの文一行

浜口 佳春

敬老会の別れの言葉達者でね

東 保

●自由題

〈特選〉

風鈴や茶舗にて購いし海苔二帖

齊田 仁

茶の缶には海苔が一帖二帖入れてあったのを、今でも覚えている。お互い匂いが大事なもののなのと思う。そういえば茶の店に海苔も売っているのだ。作者はいま、それを買って帰るのだ。

〈佳作〉法師蟬けんか坊主の葬終わる

増田 信子

足軽の門衛と撮る秋の城

井村 善也

温暖化記録づくめの台風禍

石原 新



無量自由題

兼題

浄土誌上句会のお知らせ

誌上句会〈編集部選〉

■友

迎え火や母の行李に「主婦の友」
白地着て文豪もその友だちも
友禅に金魚の泳ぐ古都晩夏
しんしんと友引の日の蟻地獄
友近けば梅雨の甲斐路となりけり
友釣りの鮎の目玉に鮎映る
友と呼ぶべき昼の蟹夜の蟹

小林苑を
村田 篠
長谷川裕
三島由布子
内藤隼人
井口吾郎
市橋あゆみ

■達

町工場の達磨古びしま大暑
沸点に達し熱帯夜が縮む
石段をのぼりて夏に達しけり

幸田美智子
小林苑を
月島恭子

締切・二〇一六年十月三十日

発表・『浄土』二〇一六年十二月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■自由題

縄文の風かと思う午睡かな
七月や貝の匂いの街に住む
吾輩は芽の輪くぐりの猫である
大田区の蟻を跨げば品川区
ひつばれば昼顔動くまひるかな
順番に来て湧水に手をひたす
木の椅子に節穴がある灼けている
床の間に碁盤積みある夏座敷
猫のいる方の改札大西日

内藤隼人
井口 栞
大森吾郎
工藤 掉
長谷川裕
紺野恵子
篠崎沙織
富沢智久
仁科 一步

達筆の「ぢ」の看板や夏の駅
伊達巻の一本残る冷蔵庫
夜濯や達意の一句浮かぶまで
天瓜粉つぎおら達の列の番
居酒屋の達人並び涼しかり
涼雨なり蓋し達意の弔辞なり
驟雨・海くちづけ・三好達治の詩

工藤 掉
目黒祐天
峰 玲子
遠山左近
井坂直光
今西浩司
伊東聖子

004

かい目

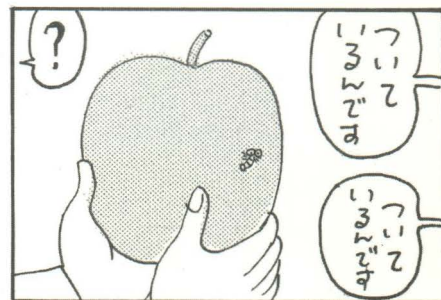
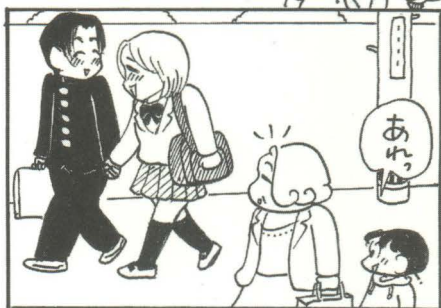
さっちゃんねネッ

かまち♡ふしろう



かまち♡ふしろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。
 福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞

(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・)



編集後記

筋雲に空の高さを教えられ

岱潤

七月に日本にも配信されたスマホのゲーム「ポケモンGO」は、今は近くではその声を聞かない。当時は我が寺も「ポケストップ」になっていて、夜中まで寺の前を歩く人だかりがあった。増上寺の大殿が「バトルフィールド」（戦う場）になっていて、一時はどうなることかと心配もしたが、その喧噪も何処へやらというところのようだ。しかし、先々月末には車の運転をしなからゲームをしていて、三人の方が亡くなられた。笑い話でなくなってしまった。

青山俊薫師が雑誌でこんな話を紹介し

ていた。大坂の風外禪師の所に商人が相談に来て話をしていた。そこに一匹のアブが飛び込んだ。アブは外に出ようとして一つの所にぶつかっては落ちるを繰り返している。その様子に見とれてしまった禪師に商人が、「禪師はアブがお好きですか」とたまりかねて言った。禪師は「これは失礼。ですがこのアブはかわいそうですな、この寺は見ての荒れ寺、障子は破れているし、何処にだって出口はある。それなのに一つ所にぶつかってばかりじゃ、でも、人間も似たようなことをしてますな。商人はこの言葉にハッと気づいたのか、「ありがとうございまして」と言って帰り、それ以来熱心な信

者になったという話だ。我々の目線を広げることの必要性を、アブが教えてくれている。スマホにばかり、そして自分にばかりにしか目が向かない現代の我々に、気づかなければならない。（長）

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十二巻十月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十八年九月二十日

発行 平成二十八年十月一日

発行人

編集人

印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五・〇一一

東京都港区芝公園四丁目四明照会館四階

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
脳博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※ 寺院名 () を入れる・入れない

※ 関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※ 写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※ 消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※ 1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

毎日のお経だから
心のこもったオリジナルな
ものがある。



薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の皆様へ

写詠歌 セット

浄土宗歌「月影」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう！

当会オリジナル新商品！！

※ ご注文と詳細はウラ面へ

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※ お問い合わせは、Fax またはメール
hounen@jodo.ne.jp へお願いします。